

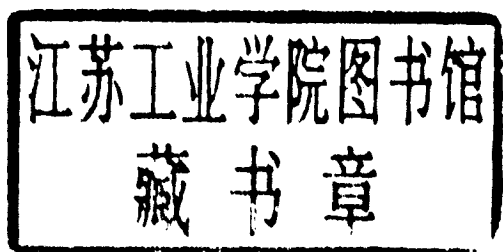
年刊歌集

一九九〇年版

日本歌人々

年 刊 歌 集

1 9 9 0 年 版



日 本 歌 人 ク ラ ブ

平成2年11月31日印刷
平成2年12月10日発行

年刊歌集 一九九〇年版

編集者 年刊歌集編集委員会

発行者 水上正直

発行所 日本歌人クラブ

〒一五一 東京都渋谷区代々木2-23-1

ニューステイトメナー八四七号

電話 ○三二九九一六五八五(代表)

振替 東京 八一三二二七四番

印刷所 新日本印刷株式会社

〒一六三 東京都新宿区市谷本村町3-29

定価 四、〇〇〇円(送料共)

1990年版目次

な	と	て	つ	ち	た	そ	せ	す	し	さ	こ	け	く	き	か	お	え	う	い	あ
.....																				
二七九	二七二	二七〇	二六三	二六二	二三三	二三二	二二九	二一六	一九七	一七六	一五九	一五九	一四九	一三六	一〇四	七二	六八	五八	二一	一
出詠者住所録	わ	ろ	り	よ	ゆ	や	も	め	む	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ね	ぬ	に
.....																				
巻末	四四一	四四一	四四一	四三〇	四二八	四〇八	三九九	三九九	三九五	三七八	三六三	三五六	三五六	三四一	三三二	三一三	三〇九	三〇八	三〇七	三〇一

あ

安西彩乃 あんざい あやの

球磨の川霧

かんざらしの粉もて作りし白玉を食ます小店の八十媼
かたくなに商ひ来しらし八十の媼の顔にとほる鼻筋
渡りゆく橋の人かげ隠ろはせ球磨の流れに朝霧のぼる
川霧の白き中より現れて白鷺三羽低く翔びゆく
たちこむる霧に隠ろふ葦なかに川の千鳥の啼き交す声

安東桂子 あんど けいこ

五首

絹糸よりなほやはらかき蜘蛛の巣に玉ちりばめて霧雨の降る
小さき魚くはへてゐるは翡翠か泰然として巖の上に
合歓のはなそのやはらかき桃色は乙女の頬を刷く筆に似る
陶片を龍のかたちに貼りつけし伊万里の郷の橋の欄
手に触れてそのやさしさの懐かしく茶碗一つを我もあがなふ

安東久子 あんど ひさこ

五首

茎紅き野蔦を東ねリヤカーに今年も来たる媼呼び止む
すこやかな寢息をたつる女童の額にうすらに汗はにじめる
収穫を終えたるキャベツ畑には散りぼう外葉にもんしる蝶とぶ
病む夫を残し出でんと玄関の鉤さす音のひびくに驚く
病院のエレベーターは吐息のごとひとゆらぎして扉を開く

安藤いく子 あんど いくこ

花殻を摘む

いろ褪せてなほ匂ひたつ梔子の香を惜しみつつ花殻を摘む
折々に花を駅舎に飾る女今朝はみもぎを活け込みてゐつ
しなひつつばらに咲ける連翹の枝をもみあげ春風吹く
峽に湧く清水をすくひふむ刻癒えしこの身のしみじみ愛し
吹き荒ぶ初木枯に柿の実の音たてて落つまたひとつ落つ

安藤佳光 あんど けいこう

病窓

酸欠の持病で臆てわが意識うすれゆくやも秋の夜を覚む
酸素吸入しつつ生きているこの体あぶく見ており今日誕生日
入院も幾月なるに食べられず眠れざる朝は妻の顔見ず
近く人の明日は我かも臥しながら聞く勤行に耳澄ませおり
季早く花房長く庭藤の我を待つらん訪う人もなく

安藤佐貴子

津軽今昔

桜散る鷹揚城の土ふめばかなしく還る人も昔も
下乗橋の丹の欄に沿ひ歩むとき故なくにじむ泪を拭ふ
遠き日の記憶にかへる人ありて津軽の山河吾を揺りやまず
若き日の哀歎秘めし旧居跡へめぐり見つつ泪にじみ来
みちのくの旅の終りは車窓より海に没る陽を追ひてさざめく

安藤鶴子

花

天を突く辛夷の花のことごとくに咲きて真白し三月の空
家並の合間に咲ける花桃のピンクの彩が空に広がる
大輪の四海波椿の花間を小鳥行き交ふ出入り忙しく
リラの花咲き初めにけり仄かなる香の匂ひ来て仰ぐ築山
八重桜空に広がり咲き尽きて花吹雪しばし惜しげなく散る

安藤彦三郎

寂唄庵日乗

うす雲に万朶の桜しるじろと隴ろに浮けりうつつもあらず
風無きに散り来し桜二三弁視野をよぎりて消えうせにけり
のぞむ無く願ひもなくて在るままに生きる懈怠を悔いてさびしむ
すずむしは枕の下にすだけでも浅き眠りに遠くきこゆる
すずむしの鳴く音かほそくなりて来て鳴かざる朝はすでに死にたり

安藤寛

五首

百歳を身に享くる幸もしあらば如何なる歌を詠み謹しまむ
何時までの老かうからの愛ふかく勞られつつ百歳近き
梅の盛り終れば桜にまなき春國の山河を花にうづむる
弥生三月韻き爽やかに覚るなりさ庭の梅も極り散りぬ
三月に季節の移りて咲く桜國のほこりと山河を埋む

安藤ふみ子

古き燈台

吾が町の文化財とふ燈台の点らぬままに今も港に
わが国に唯一つといふ木造の洋式燈台は百余年を経つ
往き交へる船を守りしは幾年か六角錐の白き燈台
巨大なる橋脚並ぶ高速路の下に燈台玩具の如し
遙かなる南蛮貿易偲ばるる旧堺港さびれゆくばかり

安藤美佐保

五首

野ぼたんの花凜たるは菱えやすきわれの心を支うる故か
透明なる秋の気のなか聴覚のさとき朝きく鳥々の声
骨鳴らし人來しなどは幻ぞ梅の枝ゆらし木枯しの吹く
如月の野に身籠れる寒立馬ゆきの下草息あらく食む
万葉幻想の著書賜いける人の逝きほどとなりし交り思ふ

安部匠司

獲らぬ蜜柑

実を獲らぬ蜜柑オブジエのごと枯れて立てる前山菜は咲く長く
浮き沈み農にもありて不思議なし獲らぬ蜜柑の山に鶴殖ゆ
自由化に先立ちて伐りし相州みかん炭に焼きたる窯跡さびし
蜜柑伐る農に転作の補償ありわれは黙して商を記帳す
転作物のキュウイ年々値を下げて今日はスーパーの目玉に並ぶ

安部守男

山里

黄の胡蝶群れとまりゐるさまなして連翹の花風にあかるし
昨日までは眼にあらざりし竹の子の今朝ここかしと思ひ鮮らし
きはひつつ葉を立てて西瓜太りゆく空はジェット機雲を裂きゆく
青々といのち旺んに花咲かす稲を刈るなり罪の意識に
をさな児を殺すがごとき思ひして出穂間のなき青田稲刈る

足立早苗

坂

喘ぎつつ転びつ登りしこの坂の極みに憩ふ園はありしか
いと小さき己にきびしく生きし父末路は哀し恍惚ゆゑに
為すことのすべて無意なるひと日暮るる冬の夜空の三つ星を見る
久びさに訪ふ乳母ケ家は垣くづれ吾が思ひ出も夢と消えにき
廃屋に佇ちて吾が見むなつかしき花にらなれば紫にして

足立春美

つわぶきの花

盲時計針読みかねている指先を梢で鳩よのぞかんでくれ
点字書く手元を吹ける夕べ風花びんの菊の香までを運び
ウーマンリブ妻が目覚めて自己主張主張されるは我はてこずる
働ける妻の身体は匂う故雖もむ如く性欲は来る
右の手を伸ばせばいつもの位置にあり咲く他あらぬつはぶきの花

足立弘子

四季

わが窓に四季は巡りて三十年 花鳥あまたさえずり遊ぶ
庭樹木の根元に白き蕾もち春蘭の花今朝の日溜り
歩道橋を渡る身揺らし硬質の車騒音巻きあがり来る
角にきてもの云いたげなる犬の目のわれを見上ぐる犬の顔して
音もなく花散り終えし紅梅の幹幾曲りして太き節もつ

阿川千恵子

風の盆

羽二重の半被の袖をびんと張りおはら節舞ふ八尾若衆
おはら節舞ひ進みゆく若きらの息吹ひそやか菅笠の陰に
三味につれ胡弓がむせぶおはら節舞ひの手振りにひきこまれゆく
真夜の八尾閨路に徹る胡弓の音「流し」見送る肩冷えにけり
祭果てし八尾の朝の軒毎に酔芙蓉の鉢雨後の陽を浴ぶ

阿部 昭子

桜花の輝き

生れそめの桜花の輝き眼にまぶし水したたる重みもて揺る
石塀をのり越えしだるる桜花ほのかに友の額を染むる
ゆく処さくら桜の咲き溢る花に心をまかせつつ歩む
到る処桜さくらの花開く脳裡の中にも懸命に咲く
多摩川の堤を飾る桜花いまおもおもと青葉しげれる

阿部 一直

あやめの真白

聖域のごとく互いに歛入れぬ畑の境界いぬふぐり咲く
程ほどの距離をたもちて吾の鋤く後よりあさる鶴鴿ふたつ
嘘ひとつ言いたる夕べの空しさよ風なきに揺るあやめの真白
秘らずの稲の素枯れにかからぬ案山子はあらぬ空を見ている
未だして主の決まらぬ分譲地すすきは光さす方になびけり

阿部 キミ

紅葉谷間

県境の紅葉谷つゆ帰りきて庭に鬱病の老さまよへる
遅しとの言葉も言はず忙しらの姿を見せて庭に立ちゐる
秋晴の幹に寝具を乾しつつも老二人ゐて柿落葉鳴る
県境の葡萄売の店並び居る紅葉なだりを背に背負ひて
帰り路は川霧の底に沈みたる紅葉谷間に夜気の漂ふ

阿部 早苗

みちのく

間なくして冬の眠りに入るべし八甲田山は夕光の中
逃亡の台湾猿の住みつけば野辺地とぞ云ふうなづきて聞く
浅虫の湯宿に望む青森湾夜半をしぐれてかすむ漁火
白々と海岸線の続きをりみちの奥なる町に來たりぬ
みちのくの果とふ思ひの頻りなり弘前の街に夜の雨降る

阿部 十三

平常

朝あさに出遇ひて言葉交はさざり有縁無縁といふをおもひぬ
おぼおぼと滲む陽のいろみづからを問ひ直すべき思ひいざなふ
沼の面にときに気泡をあぐるもの棲みてひそけし姿を見せず
わが子等に頒ちえざりしは戦中の飢餓耐乏感とわが死生観
孤老主題のテレビドラマを黙し視て一人寝に就く老もあるべし

阿部 米子

テレビカメラ

真実を述べむ伝へむそのみにテレビカメラの照明に佇つ
おほかたの記憶は淡し拘留所に小原訪ひしは二十年前
昭和史の一部分とぞゆくりなく係り持ちし吉展ちやん事件
悔悛をさせしは八兵衛・教誨師わが歌の師も係りたるか
ゆきつくは哲学なりと学び來し歌の心を述べにけるかな

阿部麗水

北国の鳥獸を詠む

網走湖師走凍らず三千の大白鳥が満月に照る

大寒の海の青さよ投げ捨てし雪にかもめら乗りて漂ふ

きさらぎの海の青さよ氷塊を巧みに避けて鴨落り浮く

霧晴れて釧路湿原の遠近に抱卵中の丹頂が見ゆ

夥しき軍馬輸送の元駅の助役が馬頭観音を建つ

会沢きよ子

五首

一人子を逝かせし思ひあらはにも君は持ち田の半ばを荒す

大人の背越して枯れ立つ休み田の荒草の穂はみな片靡く

早苗田のかがよふ水面にゆく風の見えつつ休み田に消ゆ

山手より街につづける堤防の窓より見えて日に日に青む

藁しべを嘴にくはへて番らし雨降りかかる屋根の端に見ゆ

相沢一好

アットランダム

漁夫の町港町なる一杯屋の名残りの店にブイヤベース食す

藤村も利一もつきてヨーロッパのこを第一歩と踏みいだしたる

黒々といくたびも色塗り替えしならむゴッホの跳ね橋在りき

ロマネスクの石の御堂の奥ふかし受胎告知の絵の浮き出づる

からつばの法王庁の抜け殻やアビニオンの街静かに見えて

相沢友子

ともに在れば

ともに在ればやすく思ふ傍へなる二匹の猫と昼を居眠る

絵はがきの「海辺の教会」頂けりその塔にある小さき十字架

微風にジギタリスの花つらなりて鈴ならし居る白き風鈴

病みをりて見ることまれに終りたる乙女椿の葉ざかりとなる

敏捷にあらざる猫が傷ぐちを舐めをり老いしわれによく似て

相沢東洋子

明日ある夕べ

ひと一人選ぶにかかるこの労苦 変はりゆく世の様をうっして

書類のみ重きトラベル・バッグ持ち空港行きのバスを待つ朝

身のめぐり広くはあらねどしばし舞ふ花卉を春の空に翔ばしむ

成田発BA008の翔ぶシベリア上空氷河のしろし

すつきりと晴れわたりたるロンドンへ半日の旅ゆふぐれ近し

相田美恵子

五首

北陸の浜べに冬を乾しあげし身の透く鱗母より届く

ファントム機優先し飛ぶ滑走路にわが乗る便の長く待たざる

田を隔て建ちたるビルの反射光常より明るくわが部屋に差す

資料館展示の農も養蚕も知らねば足早にわれは見て過ぐ

新しき桐下駄の緒をゆるめつつ母のしぐさを懐かしみゐる

相野谷森次 * 赤海星

踏切に近々生うる老木の桜おもむろに花期に近づく
長命の記録など関わり無きごとく翻車魚ゆらりと向きを変えたり
殿塚を見下ろす位置の高さにて姫塚は冬も供花絶えざる
赤海星肥料としたる無人島の捕虜の日の農折々思う
伸び易き老いたる爪のごとくくれないの色僅かにとどむ

相原恵佐子 疾風

疾風に飛びたるスカーフ探しつつ大連れて戻る菜の花畑を
耕耘機に蒔らるる菜の花の舞ひながら落ちて平らになれる寂しさ
原色に塗られし魚の飛行船が南へ泳ぐ鱗光りて
さつま芋の葉を踊らせてわたりくる風に帽子をもぎとられたり
玄関の仁王の視力が落ちぬやう御目の埃をぬぐひまゐらす

相原清美 * 酷暑の挽歌

バリバリと近きに落雷せし昼の窓打つ雨よ酷暑の挽歌
鳴咽の声をのみこむ時の喉仏ひくひくかわく音立てるのみ
雑踏に肩を触れ合う人さえも定め分ちて生きている思い
一人居より二人が淋し病む夫の記憶薄れし目と対いて
病室のばら萎えぬ間に抜き捨てる不確かな刻を咲き継ぎたれば

相原健一 早春より

大熊座樺の空にのけぞりてその大いなる姿に登る
枯芝に紫そふるすみれ草何時より春を用意せるにや
啓蟄の光の破片まとふがに足長蜂が枯芝めぐる

むつら星今宵の吾の視力表アルキオーネの一つを糺す
目覚より鳥の叫び耳につく胃カメラの結果今日は問ふべく

四十物弘明 五首

亡き母も見給ふごとし梅雨に咲く薄き紫のリアトリスの花
ねむの木の花扇状に押し開く青き空あり梅雨明けむとす
空こめしくぐもりの下白木蓮の皓々としてひと日暮れたり
越の海や海の中より浮ぶごと雪おく嶺の連らなりて立つ
舳倉島十尋の海に夫が持つ生綱捲きて海女潜く見ゆ

青井和子 花

さはやかに巧みに齡重ねたしドライフラワー薔薇のうす紅
かなたへ去れ不吉なる夢きのふの夢せんだんの花のおぼろ紫
心処の一つかげりの消ゆるまで黄菊ひとむらあたりを照らす
コスモスの線路に沿ひて咲くをみる遮断機おりたる暫くの間
幻となりし黄の原あわだち草の原超高層のビル建たんとす

青木綾子

初雪

一と夜さに替はれる外の面の銀世界遺影の夫も驚きてゐむ
降りしきる雪は自然の囲めき心やすけく家にこもらふ
君とゆきしケヤキ通りも美術館も降りつむ雪に沈みてあらむ
初雪をグラスに盛りてチェリー酒をそそぐれにき現に在りて
庭の木に積もれる雪に灯の及び十三仏の並みたる如し

青木きね夫

五首

めじろ二羽木瓜の蜜吸ふ　ひよどりはひとり来て吸ふ　時たがへつつ
翔ぶときは使はぬ脚をバランスに見事伸ばして離陸す驚は
海鳴りに逐はれて磯の千鳥らが足あとみだし翔びたつところ
通せんぼ解きて幼は玄関に単身赴任の父を見送る
幼とは思へぬ筆のととのひと鋭さを見せ賞のかがやき

青木幸一郎

* 追悼兄によせて

激動の昭和の御代を生きぬいて昭和の終る日に兄は逝きたり
思い出をたどればつきぬ大正生れのわれらの生涯波乱にみちて
長き旅路に立ちし兄の顔寂しさはなく満足感に浸りておらむ
おだやかなその性格は人に愛されて遠き旅立ちを惜しみてくれぬ
雪峰達宗居士と変りし兄の前手を合せ今日も冥福祈る

青木利夫

五首

窓の霜の稍とけゆきてこの朝の東の空のくれなるも消ゆ
傾ける日に輝きて檜紅葉日蔭の樹々の上にゆれるる
屋過ぎて庭樹のさやぐ音きこゆひとりわが臥すこの枕べに
組織の生む力によりて勢ふを吾は好まず過ぎて来りつ
雨やみて庭の緑のしづまれるひととき親し朝明けしかば

青木美沙子

句ひ初めし日

編む毛糸もはかゆき何かよき気分木犀の花句ひ初めし日
心地よく一日は過ぎぬ相向きて夕餉終りし時突然に
見るみるに耳朶白く血の氣引きゆきぬ心臓は正にボムブなりしか
死の恐怖持たで卒然逝きしこと慰めとして柩出さむ
思はざる方より弔意届き居て見せなきをも一度目醒めぬものか

青木陽子

蒼き高波

視界みな緑萌えたつ台地に立ち冷ゆる大氣とただに真向ふ
果て遠きビート畑を朱に染め大きく入りつ日軌道外さず
たぐひなき時と思ひぬオホーソクの蒼き高波ひかりをたたむ
俯きて黒百合咲けり最果てに遁れ来たりし旅にあらねど
花溢るる原生花園二分けてディーゼル列車夕日負ひゆく

青木よし江 *

第九合唱

天気予報のごとく体調訴へる夫と二人の朝がはじまる
わが町に第九合唱の集いありてこもりがちな夫のよろこぶ
婚三十五年今にして夫の声量の若々しきに吾が耳疑ふ
連日の練習きびしく夫は痛む足に通い抜き今日晴れの日迎ふ
礼装に杖を頼りて出でたてする夫を案じて涙こらえつ

青木佐喜子

五首

鵜の籠をあまた抱へて男ゆく冬のひかりを運べることく
流るとは見分かぬ闇に灰白く息吐く川か霧のただよふ
ほのかなる明りに浮ぶ桜ばな八重なす奥処闇を抱けり
砂の上の鰻無き魚を引きさらふ土用の潮とどろきやまず
夏さむき雨に濡れ来て珈琲の香れるなかにおとがひ落す

青野 うた

五首

勇気一つを友に老の日生きゆかん太陽めざすイカロスのごと
引き潮にのりてこの世をさりゆくとソロンが分けし齢も過ぎぬ
引き潮は西に向かへば西方に浄土に存すと信ぜられしか
ばけの花道にのりだし映えてをりはや来復の光となれり
雪となるかもしれぬ雨音をききつつ眠る明日は立春

青野 智道

五首

箸立てよりすんなりと三人の箸をつまめり何かよき事あらむ
まじめといふは褒めたる言葉ならざりしことよと今頃気づく
桑を挟む音のごとくに聞こえ来る差し芽をする缺の音が
刈る事もなくて過ぎ来し崖縁の苜蓿の花を子らが摘みに来る
知つてゐる事をわざわざ聞きに来る老いたる母が階段を登つて

青柳 絢子

軽き酸漿

雪囲ひほどきてやれば春芽持つ枝ははじけて我を打ちたり
大粒の葡萄ふふめば甘酸ゆき汁は溢れてむせる我かも
娘の姑の生き甲斐ならむ送り賜びし葉草強く袋に匂ふ
少しばかり遠道なればおそ秋の川土手行けば果てしなき空
色付きし酸漿振るにカラカラと淋しき音す「夏よさよなら」

青柳 節子

イスラエル拾遺

アネモネの花咲き続く国境いレバノンまでも鉄条網こえて
「幸いなるかな」残生の一日をガリラヤ湖の水に手を触れにける
エルサレムに花蘇芳の花季きわまれりユダが縊りしと伝うる木の裔
はるけくもたどりつきたる悲しみの道われも見えざる十字架を負う
虐殺記念館の照明辛うじて届きたり人皮もて作られしマンドリンまたサンダル

青柳 猛あおやなぎ たけし

虹

青銅の鶴の嘴より噴水のしぶきは立ちて一瞬の虹
鯛の声ひびき合ふ入海に膨むごとく潮の満ちくる

ゆく道のみだるる草に巡礼の鈴振るごとく虫の啼き出づ
棧橋を渡り行きたる自動車がフェリーボートへやすやすと入る
立ち枯るる高草の辺に思へば職退きてより七年を経つ

青柳 千夢あおやなぎ ちがく

もんどり打ちて

ひとの想ひ乱高下なれ卓さむしはなの画集の躁とてうつとて
ときわがずわたなな虚空の音せまりもんどり打ちて受くるほかなく
唐突にひかりおこして白スーツもの問うてまたゆゑなきほだし
かたるなき五月の風を過ごしやりたつねあぐねて生ひ郷エレジー
しる陽なか桜花ひた舞ひいつさんにひとの来し方散らしちらしめ

青山 かほるあおやま

五首

杜出でて竹林に移る綿雲の光りてしき鳴く夕の鶯
指先をふるるや脆く仮死装ふ天道虫の知恵を愛しむ
夕光にくちなしの花匂ひ立ち畳みこまれし愚は忘れたし
法師蟬いづこに鳴くや桶狭間人馬奔めく幻覚止まず
小康を得たる夫の丹精に鉢植ゑバインの熟れて匂へる

赤井 清子あかい きよこ

五首

若き日の父母が使ひし洋皿を捨てむときめし晦日雨降る
黒豆を煮ては友にも分かちたり独り暮しの気安さにして
いくつかの日用品を購ひてたのしみてをり独りぬる日を
練炭の炎たちゆく気配して亡母の恋しき夕となりぬ
練炭の火鉢囲みて焼く餅に孫らの小さき拍手がつづく

赤池 芳彦あかい けい ひこ

冬の駅

コンコースを小走りに来る教へ子の記憶がさきに着く冬の駅
三つ編みを背に垂らして学びぬし人は三十路の歳月を負ふ
肌荒れを言ひつくるひて囲みたる掌にくぐもりし空間を持つ
起ちゆける席にあるいは戻るべく退かれしままのマホガニの椅子
還らざる過去をなぞりて去ぬる人へあの一言が告げたかりしに

赤石 治子あかいし ちよこ

五首

廃屋の庭にあかるき曼珠沙華人の貌かたちに首をのばして
言ひ伝えなど気にはしませぬ彼岸花むかしの道にあかかと咲く
晴の服喪の服かの服身にまとふ布一枚を仕分けて居りぬ
幾万のサフランの蕊に染まりたる帯締めて今日人に会ひに行く
髪洗ふと頭を下げしとき香世よりをみな抱くかなしみは来つ

赤川達海

いのち

わがえにし継ぐなる胎児超音波画像に見入るなだらかな線
いまの世の粗き移ろひふと思ふ新生児孫の頬をふれつつ
孫みどり児頬ふつくとあたたかし超音波画像と似たおどろき
幼な孫の育つはやさよ経る日々よ春の気配もかはりはげしく
朝毎の時刻も同じ裏道に青き芽みたり石垣許に

赤沢幸枝 * 五首

雪の精ひそみいるらし美の極致ふりやむ尾根の断崖に立つ
鳴咽とも覇者の涙の燦然とたかく映せる雨後の碧空
ふくらみし梅のつばみを伝い落雪はしきり安らぐ窓に
響き合う荒き男の歌声は心に沁みて宴たけなわ
散り急ぐ裏枯れ青葉のアカシアは寂しさをあおり今日は霜降

赤津健壽 大和国原

一刷毛の雲を残してよべよりの雨あがりたり大和国原
目交ひの空一杯に顕ちてくる持統女帝の藤原の宮
曲りながら続ける寺の坂道を迦樓羅・緊那羅・摩喉羅伽が行く
やはらかく練り上げられし内陣の闇が流るる我の目の先
山陰の風に向かひて帰る道も一つ墓を越えねばならぬ

赤松伴子 * 女面

双の掌に溢るるばかりくちなしの花殻摘めばかなしさ香る
まばたけば涙こぼるるまばたけぬ女面よ秋霖音消して降る
死に場所を捜すか冬の蜂一つ四季咲きの薔薇の根もとによろぼう
屈みたる心興せと聞裂きて冬雷は梁鳴らしゆく
恙なき一日の終り幼子の手をひき湖に没り陽見にゆく

赤松元敏 海に向かひて

始原なるいのち生まれし物語いなづま海を裂きしはづみか
流れゆき流れ来たれる潮湛へなほ蕩々と大きな力は
この海がゆだねられある凡常に思ひ至れと波は鳴るべし
ふくれつつ沖のうねりの寄りくるが心待ちとなりてゆきたり
海路征き多く果てにき兵たりて残れるは老ゆ力消えつつ

赤松宜子 夫に捧ぐ

帰宅時刻の気になるさへや幸せと待ちある夫にメロン購ふ
真夜ひとり看取りつつめて吾がものと胸乳に夫の冷えし手温む
予後の悪しきデータ示めし言ふ医師に諸ひつつも諸はぬもの
束の間に夫を逝かせし悔しさは燠と残りつつ時に燃え立つ
部屋ごとにあかあかと灯を点しゐてなほなほ淋し独り住む夜は

秋永正枝 あきなが まさえ

朝茶の香り

生かさるる命あり得て今日ここに卒寿たまはる身のすこやかに
ちつちつと破魔矢に結へる小鈴鳴るわが耳もとに幸つるがに
みどり濃き朝茶の香り掌にのせて卒寿を生きし果報をすす
つくづくといのちま愛し万両の朱のつぶら実且の陽に輝る
紅梅の匂ふ庭のべはつ陽さし部屋天井陽炎ゆらぐ

秋元千恵子 あきもと ちえこ

* 五首

巨いなる桜不遜に吹かれつつ翻りつつ舞いのぼる花
消費税・リクルートなど腹立たし花の下道われはゆきつつ
うつむきしつかのまにして電車去り向いのホームの人ら消えたり
若き日の感傷に見る雨の中ぐしょぬれの白き布靴
千葉の街はわれのかなしみ人ひとり葬りて歩む夏の陽ざかり

秋元ミナ あきもと

みどり児

祝福はこの手の中に生れし嬰兒よある日天使の悪戯をせむ
ばつちりと見開く眸 みどり児のこの目に泪流す日あるや
桜貝の様なみどり児の指の爪触るればかすかひく力ある
もみぢの手をひらきてゐたりみどり児のこの手をつなぎ野草を摘まむ
突然に友失ひし悲しみや百ワット電球消えたる如し

秋本文武 あきもと ぶんぶ

*

綾香・年少組入園

走馬灯の如く過ぎゆき綾香三つ父の日ひとり旅先で祝う
風薫る婚後三十二年記念日に遂に手にした講道館七段
還暦の午にまたがる綾香三歳早駆けならすしずしずあゆむ
板キック二十五米ラストなれど完泳三歳は綾香一人
年少組綾香入園八重桜寿齢重ねる庭はこり立つ

秋山美恵子 あきやま みえこ

師

きつつきの歌の賀状に限りなく寂しき覚ゆ空しさおぼゆ
十年余り吾は導かれきて一本の歌集なしたれば永久に忘れし
再びをみ健やかなる師の君に教へ給はむすべもすべなし
舍利礼門眞正の唱へに口ずさむ永久の眠りにつかむとす宗匠
「雁田山賛歌」を掲げ献茶なす黒茶茶盃に点つ七七忌

鮑浦幸子 あくろ さいちこ

出雲

いにしへを恋ふところに古事記一冊持ち出てゆく出雲の旅へ
むかし出雲に素戔之男が初めて降りし日の秋ならば萩のなだれ咲きぬし
素戔之男の荒び思へばうつし世の髪長をとこなよなよとくる
神ふたり相合ひて産みしといふ国にいま美穂の実りてそよぐ
「あなにやし えをみなを」伊弉諾のこゑの降りこよこの空のもと

浅井不二雄 * 五首

若き日の木曳きの友ら偲びつつ夕照る峽の木馬徑をゆく
夏の日に木曳きの友ら泉汲み冷汁つくりし昼餉のありき
満ち潮の匂える如き乙女らの下校の群れにすれ違いたり
ふくらはぎ白き少女らベダル踏み青田の風の中を過ぎゆく
華やぎしあとの寂しさ花火師の使い果たせし闇ふかき空

浅枝きよみ * 身辺余情

隣り合う厨も点りてひとり居の老女がひくくたつる物音
隣組で原爆孤老を葬りし夜ご苦勞賃を町よりくださる
八月の広島空に放たれし鳩のはばたきテレビにひびく
野牡丹の真夏真昼のむらさきをこよなきものと植えて久しき
夫の機嫌取るにはあらず湯を差せば揃いの湯呑に茶の香りたつ

浅生千代子 * 花菖蒲

つと触れば朝つゆ散らす花菖蒲浄らなるものに躊躇おぼゆ
根を洗うせせらぎの音を意にかけず人の目すべて花に傾く
ひたひたと花菖蒲の根を洗う水ゆるやかにして花を養う
霧ふふむ花卉の薨にそつと触れその深淵に頭つ女人あり
花びらの垂れてつくれる陰影に見事に嵌まるわが詩ごころ

浅川かね子 母病む

娘のわれより黒き髪を刈りあげし日より鏡を葬れり母は
五分刈りに刈られし母の頭なれ髪のがれにブラシをさせて
己が身にまっつはるものを捨てさりて素肌に病衣まとへる母よ
祖父も祖母も二人の伯母も父も叔父も母の裡にはみな生きてゐる
備忘録繰ればこの夜仲台寺の塀にうるみて白梅咲けり

浅川喜代子 五首

病むことも小さき人生の起伏とや夫の血圧のよき日あしき日
死は冥きこととわれに言ふ夫のC・Tの説明をききて
夫と行きしかのベルリンの高き壁とり毀されし明るきニュース
小夜ふけを冬の雷轟きてこと多かりき歳逝かんとす
北ぐにに業のごとくに降る雪を疎みてくらす老いのふかみて

浅川広一 青の破源

殺戮と青の破滅と充足と 三千年の裔の銃口
旅人の昨日はすでに還らない 天安門に虹が出てゐた
暁闇の天安門の合歓の花 はた一篇の詩を生むために
昨日買った透きとほる傘の向うに映る 神の非情とアネモネ
透きとほった空間あれど明日あれど ちぎれたボタン 血ぬられた大地

あさだ
浅田 きみ

五首

夕焼けの空に禱りの刻ありぬ電線に並ぶ雀動かず
虚飾なきありさまにして夕暮の寒き電線に雀子ならぶ
誰が流す生活の水ぞ沈々と夜のくだちの溝川に落つ
溝川の昏きを流るる排水に満天の星の光届かず
紅葉照る寺院にしてあぢさゐは形崩さず滅びにむかふ

あさだ まさい
浅田 雅一 * いまも茂吉は

茂吉記念館におひろの写真見えずなり失せし時代を懐かしみおり
美しき八おひろの幻描きつつ茂吉の哀しみにふれて館出ず
茂吉の生家の庭に雞らが土掻く見つつ寄りて声かく
のど赤き玄鳥いまも訪いくるや茂吉の嘆きの沁みいる生家
傍らのアララギいよよ太りつつ茂吉の墓の黒く小さし

あさの ひとみ
浅野 妃都美

昭和の偲

新しき大橋渡り行く汽車に連絡船も祝福の銅羅
七十五年の輝く歴史へ餞と連絡船に優勝旗積む
病魔との闘ひの日々天皇は大和男の子の心さながら
「戦犯は吾一人」とぞ占領下マ元師に宣ひしとぞ
八私も戦後の一翼担ひしと眉上げて言はむ暁の新聞輸送車に

あさの みづえ
浅野 瑞枝 *

伊勢参宮

人みなに追越されつつも杖曳きて朝の内宮の玉砂利を踏む
なにごとの在しますかと詠み給いし西行憶いつ五十鈴川に行つ
敗戦の傷みも深く秘め持ちて神杉黙し年輪を刻む
春風に桜花たおやかになびかえば山動くがに錯覚のあり
梅雨の朝うす暗がりの厨にてなめくじの跡華麗に光れり

あさの よしろう
浅羽 芳郎

晩秋歳末

晩秋の淡き日射しに紅葉せし病葉わづか残す桜樹
傷付け合ひ傷を嘗め合ふけだものを生きて居る身の外と思はぬ
風のゆく道にあるらし再びを掃き寄せゆくに落葉の走る
餅搗き器購はんとの子の電話歳末近しとしみて思ふも
炊飯器音たててゐる厨辺に「かまど神」とふを今年も祭る

あさの はるえ
浅原 春枝 *

聞き耳ずきん

聞き耳ずきん欲しさと思うはるばると海を越えて来て燕のさえずる
待合室に患者ひしめき人間の生きたき念いの氣息充ち満つ
傷み持ついのちを沈む病棟に闇の消るる真夜を覚めおり
内蔵助の演拌に涙しほりたり出ずればドームの鉄骨眩し
娘に遺すものなきわれの拭き込みし廊下は黒き影を映せり